追悼

「救い、救われこの生命」
ああ、これじゃまるでブラームス
七五調の古典を撫でさすり
破壊は彼の手に余る

「逝去した者への言葉により」
ああ、何と卑怯な陰口か
生きる者へは侮蔑のみ
潔しとは呆れ果てる

「敗れた者の遠吠えを」
おやおやこれは聞こえたか
耳だけはそばだてているらしい
どうにかポーズ、取ってはいるが

「赤恥さらして、あえて叫ぶ」
これは殊勝な心がけ
と言いたいところだが
これはそれ、自棄糞に過ぎぬ

「これが私の追悼と思し召し」
急転直下の哀願調
死人に縋れば恥もなし
生きる者には足蹴をくれて

「是非とも貴公の威光を拝借し」
そろそろ本音がぽろり
ここまで我も忘れれば
何も聞こえぬものと見え

「新しきものは古きものからと」
おやおやどうやらこれは
己の詩への言い訳か
これじゃ本当の遠吠えだ

「あの脳足りんの詩人共に」
おっとこれはいきなりの棄てゼリフ

死人には自ら敗れても
生人には敗れたくないと見える

「・・・」
・・・

(1989.1.8)